

2023年の回顧と新年の展望

～ 2023年の回顧 ～

国内景気

～社会経済活動への制約が解消に向かうなか、緩やかな回復基調をたどる

2023年の国内景気を振り返りますと、海外経済の減速や資源価格・物価の上昇などの下押し圧力がみられましたが、コロナ禍による社会経済活動への制約が解消に向かうなか、各種政策の効果や雇用・所得環境の改善もあり、緩やかな回復基調をたどりました。

項目別にみますと、個人消費は、新型コロナウイルス感染症の影響が和らぐなか、宿泊・飲食など対面型サービス関連を中心に改善の動きが進みました。また、半導体不足などの供給制約が緩和に向かい、自動車販売が増加し耐久財が持ち直した一方、衣料品などの半耐久財や食料品などの非耐久財は、物価上昇の影響もあり緩やかな回復にとどまりました。

設備投資は、持ち直しの動きが続きました。国内景気の改善が続くなか、情報化投資、省力化投資、環境関連投資など将来を見据えた投資に対する意欲が強まりました。

生産は、年初は、海外経済の減速などを背景とした半導体や電子部品需要のピークアウト、半導体不足による自動車の生産制約等を受けて弱い動きとなりました。春先以降は、電子部品などの幅広い品目で需要の低迷は続いたものの、自動車の生産制約が解消に向かい持ち直したことから、総体では底堅く推移しました。

県内景気

～個人消費をけん引役に緩やかな回復基調で推移

県内景気を振り返りますと、新型コロナウイルス感染症の影響が和らぐなか、サービス関連消費を中心に個人消費で改善が進み、全体としては緩やかな回復基調で推移したものの、本県の主力産業である機械工業など一部に弱い動きがみられました。

項目別にみますと、個人消費は、年間を通じて持ち直しの動きが続きました。特に、新型コロナウイルス感染症の分類が5類に移行した以降は、外出機会が増加するなか、食料品が堅調に推移したほか、衣料品で回復の動きが強まりました。また、乗用車販売は、完成車メーカーの増産に伴い納車が進んだことから、春先以降は徐々に持ち直しました。一方、家電品は、物価高騰に伴い大型の黒物・白物を中心に弱含みました。

設備投資は、機械工業で、工場の新設・改装など生産能力の増強投資が、また、

宿泊施設では、アフターコロナに向けた付加価値向上投資もみられましたが、全体としては、景気の先行き懸念や建築費の高止まりが足かせとなり、慎重姿勢が続きました。なお、公共投資が堅調に推移した一方、住宅投資は建設コストの増加が重石となり軟調に推移しました。

生産は、本件の主力産業である機械工業において、生産調整の影響もあり半導体製造装置や電子部品・デバイスなど多様な品目で減産となるなど軟調に推移しました。一方、宝飾、ワイン、ニット、織物などの地場産業は、国内市場の縮小や原材料価格の上昇など厳しい局面もみられましたが、生産の国内回帰の進展や人流の増加、消費マインドの改善などから、持ち直しの動きがみられました。

なお、観光関連をみますと、全国旅行支援などの支援策もあり国内観光客がコロナ禍前の水準まで回復したほか、外国人への入国制限がほぼ撤廃された4月以降は、富士北麓地域を中心に外国人観光客が急増しました。

～ 新年の展望 ～

国内景気

～個人消費を中心に緩やかな回復が続くが、不安要素も

2024年の国内景気は、対面型サービス消費を中心に個人消費が回復基調で推移するほか、供給制約の解消に伴う生産の増加や企業の底堅い設備投資意欲が下支えとなり、緩やかな回復が続くとみられます。ただし、世界経済の減速を背景とする輸出の低迷や物価上昇に伴う消費マインドの低下、人手不足による供給制約などが景気を下振れさせる要因となるため、注意する必要があります。

項目別にみますと、個人消費は、感染状況に左右されないアフターコロナの時代に入ることや賃上げなど所得環境の改善に加え、コロナ禍で積み上がった貯蓄を原資としたリベンジ消費の拡大も見込まれるため、持ち直していくとみられます。ただし、物価の上昇が消費マインドに及ぼす影響は大きく、注視が必要です。

設備投資は、企業業績の改善が下支えとなるなか、省力化や情報化対応に向けたデジタル投資をけん引役として、底堅く推移するものとみられます。

生産は、世界経済の停滞感を背景とした輸出の伸び悩みから、当面は力強さを欠く展開が予想されます。ただし、中期的には、底堅い米国経済に支えられた米国向けや、半導体・電子部品需要の底入れが見込まれるアジア向けを中心に輸出の増加が期待されることから、生産も持ち直しの動きを強めていくとみられます。

県内景気

～緩やかな持ち直しの動きが続くが、先行きの不透明感は強い

県内景気は、生産面で機械工業が増産に転じるなかで、設備投資も持ち直しに向かうほか、所得環境の改善などを通して個人消費も回復基調で推移していくことから、全体としては緩やかな持ち直しの動きが続くとみられます。

項目別にみると、個人消費は、社会経済活動の正常化が着実に進むなかで、外

出・消費に対する前向きの動きが強まっていくと考えられます。政府による物価対策や自治体などの需要喚起策も下支えとなり、消費マインドの更なる改善が期待されます。ただし、所得環境の状況如何によっては、大きく下振れする可能性があるため、年前半の賃上げ状況を注視する必要があります。

設備投資は、機械工業で生産能力増強投資が、また、非製造業で省力化・合理化投資が増加していくとみられます。なお、山梨中央銀行が実施した「県内企業経営動向調査」の2023年度下期（23年10月～24年3月）の設備投資計画においても、製造業・非製造業ともに、実施予定率の上昇および投資額の増加を見込むなど、前向きな姿勢が窺われています。

生産面について、機械工業は、長期化していた在庫調整の終息に伴い、春先以降は、半導体製造装置を中心に増勢に向かうとみられます。また、宝飾、ワイン、ニット、織物などの地場産業については、コロナ禍の影響が緩和するなかで堅調に推移すると考えられます。

なお、観光関連をみると、インバウンド需要の回復が見込まれ、コロナ禍前を超える賑わいを取り戻すことが期待されます。

～ 辰（タツ）の話 ～

2024年は、辰年です。辰（龍）の姿について中国の「爾雅翼」（じがよく）には、「角は鹿に似る。頭は駝（らくだ）に似る。目は鬼に似る。項（くび）は蛇に似る。腹は蜃（しおふき）に似る。鱗は魚に似る。爪は鷹に似る。掌は虎に似る。耳は牛に似る。」と記載されており、空想上の存在として描かれています。十二支の中では唯一架空の動物です。

龍は、今日では雨乞いの神様として馴染み深いのではないのでしょうか。その歴史は古く、およそ2000年前には中国で龍に対して雨乞いの祭りが行われていました。こうした中国の龍が日本に伝わり、日本の土着の水の神と同じように祀られることで、雨乞いの神様として定着していったと言われてしています。

また、龍は、空想上の生き物であることから不思議な力を持つと考えられています。前述の通り、雨乞いの神様として天候を操るほか、富を授けるという話もあります。「今昔物語集」には、「観音様を信仰する若者が小さな蛇を助けたところ、その蛇は龍王の娘で、助けたお礼に一生減らない金の餅をもらう」という逸話が残されています。

なお、龍にまつわる中国の故事に由来した諺のひとつに、「画竜点睛を欠く」があります。「遙か昔の中国で、画家が皇帝から壁に龍の絵を描くよう命じられました。画家は素晴らしい龍の絵を描きましたが、最後の目を描こうとしません。理由を聞くと、『龍の目を描き入ると、龍は遠くへ逃げてしまう』と答えました。それでも目を描くよう懇願された画家が諦めて目を描くと、すぐに龍は動きだし、遙か彼方へ飛んでいってしまいました。」という逸話から、画竜点睛は「最後の大事な仕上げ」を意味し、「画竜点睛を欠く」は「よくできていても、肝心なところが欠けているために、完全とはいえないこと（成語大辞苑）」という意味で使われるようになりました。

わが国の辰年の歴史を振り返りますと、富士山噴火（800）、戊辰戦争（1868）、日露戦争勃発（1904）、普通選挙法による最初の衆議院議員総選挙（1940）、国立近代美術館開館（1952）、東京オリンピック（1964）、ロッキード事件強制捜査（1976）、瀬戸大橋開通、東北・上越新幹線開業（1988）、三宅島噴火（2000）、東京スカイツリー開業（2012）などの出来事がありました。

また、山梨県関連では、明治天皇巡幸で来県（1880）、若尾逸平ら甲府商工談話会を組織（1892）、県立農林学校創立（1904）、県病院（現県立中央病院）落成（1916）、富士身延鉄道（現・身延線）全線開通（1928）、野呂川開発起工式（1952）、八ヶ岳中信高原国定公園指定（1964）、「甲府地域テクノポリス計画」を通産省が承認（1988）、小瀬スポーツ公園アイスアリーナオープン（2000）、米倉山太陽光発電所 PR 施設「ゆめソーラー館やまなし」オープン（2012）などの出来事がみられました。

なお、辰年生まれの著名人としては、芥川龍之介、阿部寛、池江璃花子、内村光良、王貞治、加藤一二三、葛飾北斎、草刈正雄、小池百合子、さだまさし、サルバドール・ダリ、出川哲郎、ニコラス・ケイジ、濱田岳、坂東英二、一青窈、松坂桃李、三浦友和、水谷豊、山本耕史、吉幾三、吉高由里子などがいます。

陰陽五行によると、2024年は、「甲辰（きのえ・たつ）」にあたります。「甲」には、「草木が殻を破って頭を少し出している状態」という意味があります。また、「辰」には、「理想に向かって辛抱強く妨害と戦いながら歩を進めていく」という意味があります。このため、「甲辰」は、「古いしがらみを破る」、「新たな歩を進めていく」というような意味になるのでしょうか。

2023年は、新型コロナウイルス感染症の分類が変更となり、社会経済活動が正常化するなか、生成 AI の登場や DX（デジタルトランスフォーメーション）によるデジタル技術の浸透などアフターコロナの新しい時代を感じさせる年でした。甲辰の 2024 年は、この新しい時代をさらに飛躍させるためにも「龍の雲を得るが如く」古い体制から脱却し、革新的な歩を進めるなか「驪龍之珠」（りりゅうのたま）を得る年にしたいものです。

※蜃（しおふき）…蜃気楼を作り出すといわれる伝説の生物で、姿は巨大なハマグリに似ているとされている。

※龍の雲を得るが如く…龍が雲を得て天に昇るように、英雄豪傑などが機を得て活躍するさま

※驪龍之珠…危険を冒さなくては手に入れることのできない貴重なもの

※辰（タツ）の話は、十二支の民俗誌（八坂書房）などから当社で作成

2023年12月
山梨中銀経営コンサルティング株式会社